

浄土

十一月号

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
 昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別授受記録誌第三五二号)
 昭和三十九年十月二十五日 印刷 昭和三十九年十一月一日発行

第三十卷

第十一号



ハワイ開教七十周年記念

法然上人鑽仰会

表紙の解説

舍利容器

シャーギーキデリー出土
(ガンダーラ)

クシナガラで入滅された釈尊は、直ちにダビに付せられ、遺灰は有力な部族の間で八等分され、八つの塔が建てられたと伝えられています。その後アショーカ王は仏法弘通の趣旨からこの八塔を開いて広大な国土の諸処に八万四千の塔を建てて仏舍利をおさめたと云われ、現在でも数多くの塔が北は雪にとざされるガンダーラ北辺から、南は常夏のアノンドラ地方に到るまで、全インド半島に散在しています。

一般に仏教の塔(ストウーパ)と云えば、オワンをふせた形に土を盛り、まわりをレンガでかため、頂上にアンブレラと呼ばれる多層のカサを立て、一番の外側には欄柱をめぐらしてあります。そしてこの大きな塚の中心部に仏舍利か、仏弟子の舍利がおさめられています。仏舍利は普通、水晶の様に透明で、薄い金箔や、小粒の宝石などと共に、ガラス、石、メダルなどの容器に入れられ、表面には、ブラフミー文字の刻文が刻まれています。ここにあげたものは、カニシカモの仏舍利容器と云われるもので、メダル製の上の上には三つの像が並び、側面にも種々の模様が浮彫りにされています。いずれも典型的なガンダーラ風の表情で、この中にガラスの容器におさめられた仏舍利がまつられています。

(佐藤良純)

年末年始には鑽仰会の施本で

浄土宝暦

おくってよろこばるれ
四十年暦

価格 一部 二十五円 十円

百部以上 単価 十八円

内容 浄土宗信徒心得

一枚起請文

年回表 その他

暦記事満載

見本は切手三十円御送り下さい

四十年版 修養ひめくり

価格 七十円 三十円

体裁 タテ 43 CM ヨコ 14 DM

用紙十七枚 二色刷

四十年度日曜表付

割引 五十部より 単価 六五円 送料

百部より 六〇円 実費

法然上人鑽仰会

東京都千代田区飯田町一丁目二番 電話(262)5944
振替 東京八二一八七番



これを見ん
をりをりことに思ひ出でて

南無阿彌陀仏と つねになへよ

法然上人御歌

— 目 次 —

表紙

舍利容器

浄土宗の信仰生活……………井川定慶…(2)

ハワイ開教70周年記念

ハワイ開教七十周年記念を迎えて……………小林大巖…(6)

ハワイ開教のこと……………新保義道…(7)

—・—・—・—・—・—・—・—

信仰生活七つの指針……………山口演真…(26)

浄土風土記 二十六夜尊……………(15)

お竹如来……………戸松学瑛…(22)

東南アジア旅行記……………佐藤行信…(18)

ご法語をいただく……………(5)

信仰の手びき(Ⅱ)

浄土三部経ものがたり……………宮林昭彦…(29)

浄土宗の信仰生活

井川 定慶

(文学博士)

一、念仏信仰の達人

世の中が忙しくなればなる程、念仏生活という宗教味注射が益々必要となつて来る。眼前に展開してくる事象に対応して処理していると、心身の疲労を感じるし、能率、進歩の向上は期し難いものである。時には静かに考えて今やっていることに反省もし、或は更に進出するか、或は方向の転換を計るかによつて以前にも増した成績をあげることが肝要である。

其の静慮に於てより善き方へ転換するか、より拙き方へ下向するか。利己的のみに墮するか、聊かでも利他的奉仕をなすべきかの分岐は其の静慮の時に発生するものである。その右せんか左せんかに依つて人生航路が大いに変つてくることは申すまでもあるまい。

人間は生れ乍らにして私利私慾を抱いてはいるが、他の動

物とは異りはじらいの心があつて、我利我利主義を露出することを遠慮するものである。また世間普通にいう「良心の苛嘔」というブレーキもかかるものである。人間の持つて生れた「仏性」、仏心の尖端がのぞいていと見るべきであらう。「話せば分る」のも人間である。また悪しき事をし乍ら其れを善事を行つてゐるとは考えないのが平常人である。よい事をしようとは考え乍ら其れが充分に出来ないと心中に欺くだけの心を持ちあわせているのが一般人間である。

そこで「こんなつまらぬ心の持主でも、心がけ一つで立派なものになりますよ」と諭して奮起を促がす。「如何なるおろかな者にても念仏信仰にさえ入れば時おり煩惱が起ろうとも、心配はいらぬ、必ず立派なものになりますよ」と激励してもみるのである。

浄土宗の元祖法然上人でも父漆間時国の仇討ちの爲めに刀

をとって立ち上がろうという殺伐な心を起された。ところが重傷をうけて危篤にあった父に却って諭されて、人を恨んで敵討ちをするものではない。人を殺せばまた自分は狙われる。心を転じて他をあわれむ仏弟子となり、懇親平等、共に共に仏道に進み入るように励まれよという父の遺言が強く幼少の勢至丸（若き日の法然上人）を感動せしめ遂に僧門に入り修業を積まれて浄土宗を開き福德円満な高僧として寂然と往生の素懷をとげ、滅後には円光和順大師の諡号をたまわるまでになっている。

法然上人は生れ乍らにして吾々に別種な人であったというなら、私どもは到底追隨出来ないが、父親が斬られて瀕死の状態に陥られるを見ると仇討ちしてみようというのであるから平々凡々の人である。私らとても上人のみあとを慕い、教えをうけて実行さえすれば学者、政治家事業家としてでなく念仏信仰の達人にはなり得る筈である。

二、平易な教え

念仏の信仰生活に入るのには何は兎もあれ元祖法然上人の御指図に導かれて行くのが最も捷徑である。

上人が平常言いならされていた言行録が『勅修法然上人行状絵図』（国宝・四十八巻・知恩院蔵）の巻二十一におさま

っている。

その二、三を紹介しよう。

其の一、仕事をしているとする。それは念仏し乍ら仕事をしていくつもりでなされや。仕事全体が念仏という聖なるものに浄化されてしまい、よこしまな考えが入る余地がなくなるよ。

其の二、されば存命中の所作前事が念仏である。算盤をしなくても、読書しても歩行もすべて念仏。此の念仏の機能が積りつもって極楽往生間違いなしという結果になる。そうなるともはや何も心配する事がなくなるではないか。

其の三、往生は必ず間違いはないと思ひ込めばもう間違いはないのである。念仏の中に——心に助け給えと念じ口に南無阿弥陀仏と称えさえすれば——生活が浄化されていく。そして心にゆとりを見出し、すりへらすとか、疲労しきることはなく、自ずと仏の慈悲を仰ぐことが出来、感謝の念に活かされて楽しい日々が送って行かれるものである。

其の四、一丈（三メートル）のほりを越えようと思うならば、一丈五尺（四米半）をこえるだけの元気を出しなさい、極楽往生を希う人も必ず往生疑いなしと、大いに覚悟のほどが固く励まれましたら、成功すること間違いはない。

其の五、然し人間はのんびんだらりとしていては怠惰に陥

いるから時々には心をも身をもひきしめて特別の念仏修行も忘れてはならぬ。

仕事に事よせた念仏生活もあるが、時折は真剣勝負の気持ちになって厳格な念仏をせよとも諭されている。

三、長寿の悦び

日常生活を念仏を申し申しの中に暮せるほど仕合せな事がない。かく苦惱無き日々となると心がひろやかになり肉躰がまた健康になるものである。

一日の仕事を終えて夕食を楽しく頂き仏前の礼拝をすませ、しばらく団欒して就寝する。即ち

阿弥陀仏と十念称えまどろまむ

長き眠りになりもこそすれ

十念

そして翌朝眼が醒めてみた時には

目がさめて今日もうれしや我がからだ

と健康であったことを喜ぶでしょう。朝の行事をすませてまた愉快に仕事場へ出かけるが、余裕があれば左右の同僚、そして同郷、進んでは社会、国のために奉仕の生活をしようではないか。

さてそうして毎日毎日おくりをして人間は一体幾歳まで生きるのでしょうか。最近の新聞報道で日本現存最高齢は百

十一才となつてゐる百歳以上が百五十四人とか。世界史上の最高は丁抹の船乗りクリスタン・ヤコブセン・ドラーケンベルグで一六二六年四月十八日生、一七七二年十月十九日死の百四十六才である。

医学者の研究では人間生長の二十五才の五倍たる百二十五才までは生きられる筈で或は百五十才まで生きるのが当然であるともいわれている。

それよりも念仏するものは南無無量寿仏で「無量寿」（限りなき永遠の生命）を頂くのであつて百四十六才どころの話ではない。

ところが瑞典では社会福祉施設も整備して長寿者が非常に多く、それが老人ホームで安楽に生活出来るように出来ているが自殺者が多いという。それは生活に対する不満でなく、長生に対する退屈からだという。念仏を申す念仏人はそうではない。いつも阿弥陀仏にひきたてられ、人生の終着点は仏の浄土と決めて安楽、而かも存命中は仏と共に生活しているから毎日毎日が楽しく決して退屈せず長寿を保ち乍らも法悦の生計が営めるのが何よりの特権である。

なお長命であればその喜びを他のものにも分与することを忘れてはならない。そして自分で出来るだけの奉仕をなすのが利他の菩薩行ではあるまいか。

ご法語をいただく

念仏は易きが故に一切に通ず。諸行は難きが故に諸機に通ぜず。然れば即ち一切衆生をして、平等に往生せしめんが為に難を捨て易を取りて、本願としたまふか。

（選択本願念仏集）

俗に「安かろう悪かろう」という言葉があります。安いかわりに悪くても仕方がないということであります。これは安いと思って買ってみると、すぐに壊れてしまい、却って損をするのをいいます。買物をする場合には確かにその通りですが、信仰の世界では全く違います。

法然上人は、このご法語に続いて次のように説かれました。

もし仏さまが像を造り塔をたてるように勧められたとしたなら、貧窮困乏の人は困ってしまします。ところが世の中には富貴の者は少なく、貧賤の者が多いのです。また仏さまが智慧や才能の優れた者だけに期待をかけら

れたとしたら、一般の人は相手にされぬことになります。ところが世の中には智慧のあるものは少なく、愚かな者が多いのです。また

仏さまが学問を積んだ者でなければ理解できないような教えを示されたとしたなら、特別な学問と研究をしていない普通の人はどうなるでしょうか。ところが世の中には、学問を積んだ人は少なく、日目の多忙な生活に追われている人が多いのです。また仏さまが一切の悪事を行わず一切の人に迷惑をかけていない人だけを救うとされたら、特に善行を重ねるでもない凡人は決して救われることがありません。ところが世の中には厳しい戒律の中で暮している人は少なく、平凡な生活を送っている人が多いのです。仏さまは一切の人々を救いたいという慈悲心を持っておられるのですから、特別な人だけにしか通用しない教えを示される筈がありません。

そして五会法事讃の「ただ心を廻して多く念仏せしむれば、よく瓦礫をして変じて金となさしむの言葉を引用されました。つまり阿弥陀さまを信仰して念仏し、念仏を続けてゆくならば、瓦や礫のようなとるにたらぬわれ

われであつても、それが浄化され、金ともいうべき浄土の菩薩さまにして下さるということです。

さてお念仏は易行であるからこそ総ての人が修行できるのであります。また易行であるから何処でも何時でも修行できるのであります。歩いていても座っていても、昼でも夜でも、お念仏を申すことができます。ところがお念仏以外の修行はそうにはゆきません。特定の人が特別な所で特殊な方法で修行しなければなりません。

実際問題としてお念仏以外の修行ができる人は幾人いるでしょうか。それはそれとしてお念仏は貴賤を選ばずということは、富貴の人にも貧賤の者にも等しく適した信仰であるということです。有智無智を論ぜずということとは智慧のあるものもないものも同じくという意味であります。このようにあらゆる人の救われる信仰という点で、お念仏はその他の修行に較べて勝れた教えであるというべきであります。ここにお念仏が易行道であるという特色があるわけであります。

（村瀬秀雄）

ハワイ開教七十周年を迎えて

浄土宗務総長

小 林 大 巖

ハワイ開教七十周年を迎えたことを聞くにつけ、感を新たにするものが多々ある。何としても、不毛の地に仏恩を知らしめられた諸先徳、諸大徳の不惜身命の努力の結実である事を思うと、襟を正さずにはいられない。それと共に、これら諸先覚者の後を継ぎ、絶えざる努力の中に、現在多くの開教師諸師が、異境の土となる覚悟で努力せられておる事は、何としても有難い事である。そして、こうした諸師の努力により、多くのハワイの人びとが、仏恩に浴して、勧喜の生活をしておられることも、又喜ばしい限りである。

聞く所に依ると、ハワイの信教の実状は、信教の自由ののちとて、誠に自由であるという。それだけに、教化伝道は、努力如何によつては、如何ほどにも出来るのであるが、反面、日本国内の様な檀家制度の無いところ故に、並々の努力では、信者を納得させ、引きずって行く事が出来ない様である。こうした中で、ハワイ中でも一、二を争う浄土宗開教師の努力は、ただ敬服の至りというほか無い。我が宗も、宗祖上人七百五十年遠忌を迎えるに当り、大同団結し、いよいよ、本格的な教化にも乗り出すこととなった。海外開教の大きな実績にも拘らず、尚、現状で充分ということは決して無い。宗門人が一体となって、内外の教化伝道に努力すること、今日程急務は無い。こうした時に開教七十周年を迎えたことは、誠に意義深い。

今日、国内外の世状は、如何にも平和の如くであるが、決してそうでない。人類の危機は、常にわれわれの周辺にある。特に激烈な新興宗教が、横暴を極めんとしつつある現状は、軽視出来ない。こうした時こそ、確固たる念仏信仰と、その実践生活こそ、危機を救い、あらゆる邪を破し、顕正するゆえんのものであると共に、われわれ自らが本当に生きる道であると信ずるものである。

私は宗門の人びとと共にハワイを訪れるのであるが、この機会に浄土門徒の同信同行として、ともに心を新たにして、宗祖上人の遺訓を奉じて、鋭意邁進することを誓いたいと思う次第である。

ハワイ開教のこと

新保義道

(ハワイ・プウネネ開教師)

一、開拓者の苦心

本年は浄土宗ハワイ開教七十周年に当り、ハワイ浄土宗教団では十月二十五日ホノルル浄土宗別院に於ける記念法要を皮切りに、宗務総長小林大巖上人を迎えて全島十五の浄土院にて七十周年記念法要を勤修することになっている。

編集部より度々投稿の催促を受けつつも今日までその責を果すことが出来なかったが、折しもこの意義ある秋を迎えて、ハワイ開教の一端を御紹介致します。

米国第五十州となったハワイの人口は、軍人を除いて約六十三万、その内日系人は大体三分の一弱の二十万余、確実な数を掴むことは困難であるが仏教徒は十二万前後ではないかと見られている。それならばこのハワイに如何にして仏教の種子が蒔かれ、培われて来ただろうか。明治元年（一八六八年）に初めてハワイへ移民として渡って来た所謂「元年者」と称せられる百五十三人、降って明治十八年（一八八五年）正式移民として来布して以来、年々送られて来た日本移民の心の中に、先祖代々育



てられて来た仏教徒が多かったことは言うまでもない。

何処も同じではありましたが、ハワイの初期移民は実に言語に絶する無法無暴、將に牛馬同様の取扱いを受け、この過酷な取扱い、過

激な労働がもとで

異郷の土と化した

人は数知れずその

墓所さえ分らない

のが大多数であっ

た。私が一昨年訪

日の折京都で見た

映画「山河あり」

にもその一部が写

し出されていたの

で、或は読者の中

にも記憶されて居

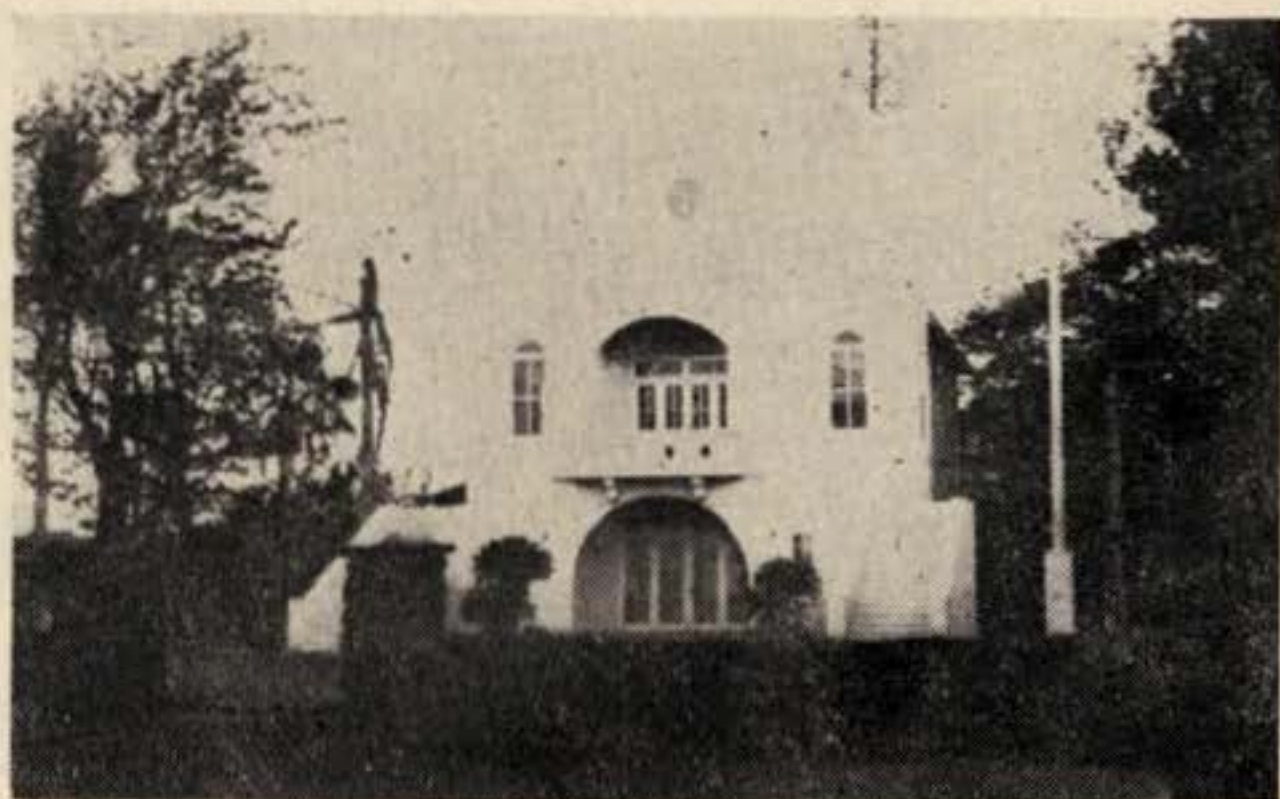
られる方があろう

かと思いますが、

古老の話と併せ考

える時それは九牛の一毛にも過ぎないようでした。この様な

生活環境の中にあつては、一部では荒んだ生活に陥る者もあ



現在のプロネネ浄土院

る反面、それだからこそ心の拠り所、精神の支柱を求めた人も多かったことと、之年の人々と共に泣き、共に励まし合つて心の糧を与えんとする伝道精神に燃えた仏教僧侶による布教の両者が一つになって幾十年、このハワイの土地に仏教が育つて来たものである。

仏教の萌芽は確かに受入れらるべき態勢にあつたとは言え、初期の仏教開教が決して容易に進められたものではない。仏教僧侶が伝道の為にハワイへ訪れはじめた頃の日系人は人心は動揺し、一部にはトバクと飲酒が盛んで、道徳も風紀も頹廢し、中には人妻の売買すら行われたとさえ言われ、仏教の布教も実に困難を極めたようである。私が直接聞いた話によると

「殆んど独身の男ばかりが仕事を終えて酒を飲み、バクチを打っている所へ開教使さんがやって来る。するとそこに居る口の悪い連中が『坊主来たか、そんな殊勝らしい顔をせず酒でも飲んで行ったらどうか』と茶碗酒を差出す始末で、お気の毒で見て居れなかった」

と言つた様なことが普通だった様です。ハワイ仏教開教の父と言われその功によって日本政府より勲六等を授与せられた本派本願寺第二代開教総長今村恵猛師の述懐によると、当時キャンプ（部落）に訪ねてゆくと仏さんの話かい、そんな

つまらぬ話を聞いて暇つぶしをするより、うちで酒でも飲んで寝ていた方がよい」

と挨拶されたと言うことである。

二、開教の歴史と現況

僧侶による仏教のハワイ渡来は、明治二十年（一八八七年）真宗の僧曜日蒼竜師が来布してホノルルを中心に各島を廻って日本人に布教したのが最初であり、続いて蒲生行也師等二、三の僧侶が単独で来布している。一宗として正式には、我が浄土宗がハワイ開教の先駆であった。即ち明治二十七年（一八九四年）白石堯海師、道重信教師等有志の発願によってハワイ宣教会が組織され、同年五月松尾諦定師をハワイに派遣して一般事情を調査させ、同年岡部学応師をハワイに派遣し布教せしめたので、この年から数えて本年は將に七十年に相当するのである。同師は各地を布教の後、明治二十九年（一八九六年）ハワイ島ハマクア地方に本格的な仏教会堂を建立し入仏慶讃法要を営むに至った。「之がハマクア仏教会堂」と名づけられ、正式布教の結果出来た日本仏教の最初の寺院であった。更に明治三十一年（一八九八年）八寿田大定、田中摩訶衍の両師が、続いて日本から開教使が派遣されて、現在ではホノルル浄土宗別院を本部とし、オアフ、カワ

イ、マウイ、ハワイの各島に十四の支部たる各浄土院と、中島開教総長以下二十三名（内留学生一）の開教使を有し、夫々の寺には婦人会、仏教青年会、日曜学校、更に半数の寺には付属日本語学校をも経営して活潑な布教伝道を展開して、名実共に真宗本派に次ぐハワイ第二の大教団となったのである。因みに従来のハワイ仏教徒の宗派別は、大体日本同様「家の宗教」の觀念が強く日本に於ける一特に出身県一各宗信徒数に比例しているようであるが、唯例外的に我が浄土宗のみが日本に於けるいくつかの大宗団を凌いで第二の大教団となった最大の原因は、我宗が他宗に先んじて正式開教に著手し、諸先徳が各地に寺院を建立して伝道を始めたことである。尚御参考までに、私が昨年全島に亘って調査した各宗の教勢を紹介致しましょう。

各宗教勢一覽表（ ）は兼務

真宗本派	浄土宗	宗派名
29 (8)	13 (2)	寺院数
45	22	開教使数
29 (8)	13 (2)	教 団
29 (7)	13 (1)	婦 人 会
29 (8)	10 (1)	シ 仏 ニ ヤ 青
29 (3)	10 (1)	シ ユ ニ ヤ 青 仏
29 (3)	11 (1)	日 校
21 (1)	5	ボーイ(ガール) ス カ ウ ト
26 (2)	8	日本語学校
3	1	学 生 寮

真宗大派	曹洞宗	真言宗	日蓮宗	単立	計
6	9 (1)	15 (2)	3 (1)	5	80 04
6	16	20	5	7	121
6	9 (1)	15	3 (1)	4	79 02
6	9 (1)	15	3 (1)	5	80 (5)
3	8 (1)	8	2	1	61 (5)
3	4	4	1		51 (4)
6	8 (1)	8	2	2	66 (5)
2	1	1			30 (1)
1	6	1			42 (2)
	1				6

三、原聖道師の開教熱

さてこの辺で話を開教初期にもどすと、私が現任するマウイ島プウネネ浄土院の開山であり、後日大正大学英文科教授を永年勤められた原聖道師が、一九五九年当院開創五十周年記念に五十年史編纂に著手した私に詳細当時の実状を御報せ頂いた御書面の一部を出来るだけ原文に忠実に記して、諸先徳が開教の為に身命を賭された尊いお姿を仰ぎたいと思う。

原師は明治四十一年（一九〇八年）十月十二日ハワイ開教使の命を受けて同年十二月二十五日ホノルル上陸、開教院（現別院）に一カ年勤務の後、翌四十二年秋新任の室山実静師と二人で、当時浄土宗未開教地の当マウイ島に開教を志念し、伝道旗を捧持してラハイナ港に上陸、山口県大島郡沖家

室浄土宗泊清寺檀家の青木氏経営の青木ホテルに入って旅装を解き、早速両師は街頭に立って野外伝道を行い、更に青木氏が義侠的護法心によって一夜同ホテルの二階を会場として大講演会を開き、浄財百余弗を集めて喜捨されたと言うことである。

ラハイナ在留一週間にしてマウイ島の玄関カフルイに移り、花岡旅館を一時的根拠として各方面に出張、野外伝道を行われた。この間同行の室山師はカワイ島開教の為カフルイ港を出帆、

「この刹那、海と陸との両者間には一時的にもせよ、離別の涙潜然たるを覚ゆ」と記されてあります。

室山師と別れた原師は单身モーニングコートに伝道旗を担ぎ、櫛風沐雨、部落々々を巡錫野外伝道を続け、為に衣服は色あせて黄色と化し、人同師を呼んで「羊カン和尚」と。当院開創時の会計を勤め、五十数年間当院の前に住まわれ、九十才の今日尚矍鑠たる当院の元老広瀬伝吉翁（往年二世のアメリカ・オリンピック界の代表的選手広瀬隆氏の父）は常に「あの原先生ですか、自分等は原先生と呼ばずに『羊カン先生』と呼んでいました。先生は実に苦勞されましたよ」と語っています。原師は当時アメリカ一の砂糖耕地の膝

元、プウネネを伝道の適所と考え日系人が東五番と呼んでいた当院の現所在地を仏法有縁の地と定め、耕地の通訳、日本人を母に持つスコットランド系ウイリアムマッゲロー氏（現在同氏の名前をとった地名が残っている）を通じて、

耕主フランクポールドウィン氏に仏教の開教使としてこの耕地内に常在することの承認を求めたが、キリスト教徒たる耕主は最初の間は難色を示した。併し同師の再三再四の懇請にその熱意を受け入れ、労務者用舎



浄土院落慶法要

宅の一室を貸与され常在することを許されたと言う。そこは同師は早速室の一隅に仏壇を設け、常時身につけていた守本尊の紙製黒本尊の御影を祀り、丸形のポテトを二つに切って

之に竹箸を立てて一対のろうそく立、空のラムネびん二本を花立、更に茶碗に土を入れて線香立として仏前を荘厳して入仏式を挙行された。（その建物は現在の当院の近くにあった由ですが、残念ながら現存しない。）

一旦拠所が確定するや同師の伝道精神は大盤石、伝道意慾は愈々熾烈、全く疲労を感じず徒歩にて諸所に伝道を開始された。何しろ徒歩のこととて、遠隔地への出張伝道の帰途砂糖黍畑、キャベの林の真只中で迷子となり野宿することも幾十度、或は猛烈なスコールに襲れて全身濡れ鼠となり、或は足の裏の底豆の為に進退に窮し、又空腹に悩まされたことも屢々であったとのことである。此の同師の窮状を目撃して同情者が挾金して金百余弗で馬と馬具一式を揃えて寄進されたので、乗馬を得た同師の運動は益々活潑広範囲となり、プウネネを中心にパイア（約十六軒）マカワオ（約二十四軒）クラ（約二十五軒）ラハイナ（約四十軒）等に及んだと記されている。今日自動車で走って一日近くかかるこの広範囲の地域を馬で廻わられた同師の超人的な御活躍には驚異の外ありません。

かくして同郷出身、或は浄土宗出身の知人が増え、教会堂新築の気運熟し、明治四十三年（一九一〇年）三月吉祥日をトして同師発願主となって新築運動を起し、耕主ポールドウ



赴任当時の筆者と家族

イン氏の好意により現敷地の貸与を受け、工事開始以来三カ月にて落慶し、元祖大師七百年御忌を併せて全ハワイ開教使随喜のもとに慶讃法要を勤修したとのことである。越えて大正二年（一九一三年）第二代大田秀山師夫妻に後事を托し、新なる希望に燃えて米大陸へ向け出発されたのであるが、

「その時世話人の一人井上利吉氏の『あなた！ここまで苦勞して、このお寺を捨てて行きますか』の一言は私の耳底に残っています」と。

話はハワイを離れるが……米大陸へ渡った原師はサンフランシスコに上陸後、バンクーバー・シヤトル・オークランド・フレズノ・ロスアンゼルス・サンデーゴ等を歩いて日本民族分布の状況を探り、就中ロスアンゼルスは天産豊富で在留

民も多く、こここそ開教の新天地と

「ここに浄土宗を弘めんとその承認方を本国宗務所に具状したが、遺憾ながら宗務所は一宗財政の困難と、後任者難を理由として之を許可しなかったため、遂に米國開教を断念しました」

と記している。ハワイに於て第二の教勢を有する浄土宗の米大陸に於けるそれは、ロスアンゼルスに別院、シカゴに教会あるのみで他宗に比し甚だ劣勢であるのは、念仏門の為に甚だ遺憾であるが、若し当時の宗務所が原師の申請を受理し支援を与えたならばこの地に於ても、ハワイに劣らざる教線が張られたに違いないと慨かざるを得ない。

四、これからの開教

この様な御活躍は敢て原聖道師一人のみでなく、多くの諸先徳が不惜身命の弘法精神によってハワイの仏教の基礎が築かれ、諸先輩がそのあとをついで今日のハワイ仏教の隆盛をみるに至ったものである。最近日本から来布する方々から「ハワイの仏教僧侶の方は日本のそれに比し、頭の下がる程各方面に御活躍して居られる」

と、私は度々おほめのお言葉を頂くのですが、私は「そのお言葉は私が頂くものでなく我々の先輩先徳に奉るべ

きものであります。私自身八年前に日本から参りましたが、日本に居る間は如何に努力してみても現状を余り出することは出来なかったし、又若し日本へ帰ることがあっても、今日ハワイで果している役割を果すことが出来るかどうかは疑問です。唯現在の私は諸先徳諸先輩のお蔭で、宗教家のはしくれとして何等かの宗教的仕事を為し易いように作られた環境の中で動いているだけなのです」

と申上げているのです。

曹洞宗の日置黙仙師がハワイ御巡錫の後

「ハワイの仏教僧侶は開教使と言っても、それは実は慰撫使に過ぎぬ。土人や白人に感化が及んでいない」

と言われたと言うことを私は或る印刷物で読んでメモをしています。勿論真偽の程は不明ですが……又その様な非難は時折耳にもするのではありますが、この非難は現在の私共が頂門の一針として受取るべきものであって、ハワイ仏教草創期の諸先徳、諸先輩に及ぼすべきものでは絶対にないと思ひ、或は我田引水のそしりを覚悟の上で敢て私見を述べたいと思います。

1. 仏教の一性格。気の進まぬ相手に一の觀念を押しつけて改宗させたり、信者を獲得する為に圧力や脅迫を加えることなく、仏の教えた道を万人の前に提供すると言う仏教の

寛容な伝道上の根本精神が不知不識の内に僧侶の性格となり、伝道上は自ら消極的とみられる面があった。

2. 語学力の不足。僧侶自身の不明ではあるが開教政策が当を得ていなかった。

3. 先ず近きより。言語の不自由を忍んでまで異民族異教徒に手を差しのべるには、自分が直接対象としなければならぬ。ない日系人が余りにも多く、それら日系人に働きかけをしなければ、四面楚歌と言ってよいキリスト教国に於て、入信させる異民族よりも遙かに多くの日系人をキリスト教に走らせていた筈である。アメリカに於ては学校教育のみにてもキリスト教徒たるの素地が養われると言われる程である。

4. 民族性。一般的に言つて僧侶のみならず島国育ちの日本人は異民族と手を握ることに消極的であり、又自分の属する教団に異民族が加わることを団員各自が歓迎しなかった。又一世中心の従前の教団その他の団体に異民族が加わっても言語、習慣の相違から、水の中に落した一滴の油とならなかつたであらうか。このことは異民族と同じ宗教であるキリスト教界に於て、最近まで日系人のみの日本人キリスト教会が存在し、現在でも日系人牧師の教会ではその殆んどメンバーが日系人と言うことのあること以ててもこ

の事が証明される。

5・キリスト教徒の非寛容性。キリスト教は仏教に比して寛容度が低く、窮窟で柔軟性なき為、キリスト教国に育ち、その習慣の中にあるキリスト教徒は、社会的慣習に束縛されて教会から離脱することは非常に困難で、例せば村八分的存在にもなりかねない恐れもある。従ってキリスト教以上に仏教に理解と好意を持つ人でもそれが為に教会を離れないのが実状である。

ハワイに来てその現実を知ることを得た私は次の様に結論づけたい。現在でこそ百名以上の開教使を有するが、当時僅々数十名に過ぎなかった開教使諸先徳が、五万乃至十万の日系人が四国に匹敵する位の面積、その上島々に分散然も交通不便の土地に於て、日本政府をバックにした総領事さえもが時には慰撫することの出来なかった困難な問題をも開教使が解決し、慰撫使としての任務を果し得たことは、開教以上のものがあると断言し得ると信ずる。

現在に於ても地域的關係で宗教を離れた日系人会を組織出来ない地方に於ては、仏教寺院が日系人の凡ゆるセンターの役割を果し、又日系人会に於てもその指導的役割を果す者の多くが熱心な仏教徒であり、仏教の僧侶である。本年皇太子殿下御夫妻がメキシコ御訪問の帰途ホノルルに御立寄りなら

れた折、奉迎送の為、総領事よりホノルル及び各島代表者の参集を求めたその会場にて、猪名川総領事が本願寺信徒の某代表に

「本日お集り頂いた代表の方々の殆んどが、先日お会いした本願寺教団の代表ではありませんか」

と言われたと言うことを、その翌日マウイ島で開かれた全ハワイ本願寺信徒会のレセプションの席上で当人から発表され、万場の割れるが如き拍手が起ったのを、その席に招かれて列っていた私は忘れることは出来ません。

併し之は過去の出来ごとであって、現在から将来にかけては慰撫使から開教使に変らねばならぬと思い、各宗共その態勢を整えつつあるので変ることと信じます。

尚諸種の統計等をお知りになりたいお方は仏教文化研究第十二号（昭和三十八年三月刊）拙稿ハワイの宗教事情を御一読下さい。

十二月号予告

座談会……学生の実践仏教を省みて……佐藤学長ほか
デンマーク訪問記……巖谷勝雄
家康と登誉天室……鶴田湛泉
信仰の手びき……宮林昭彦
童話 冬柿のなる頃……永野久子

二十六夜尊

茨城県常福寺

水戸からバスで三十分程行った所に瓜連うりづらという小さな町がある。水戸の方から行くと、平地つづきの様な町であるが、町を通り抜けてしまうと急な坂道となり、その坂を降り切った所が、久慈川となる。逆に久慈川から見ると、この町は、小高い丘の上にあることになる。一寸、堅固な城を思わせるのであるが、果して、これは瓜連城跡とされていた。

この町に、浄土宗の名刹、常福寺があり、かつては、関東十八檀林の一つとして、その偉名をとどろかせていたことは、浄土の人々なら誰しも知っていることである。しかし、何分にも、遠隔の地であるのと、学問寺であった為に、今では殆んど余り注意されていない。

十年程前までは、この寺も広大な寺域を持ち、広々とした書院を持っていたが、本堂は落雷で焼けて、僅かに開山堂が本堂替りとなり、草むらの中に、伝統ある歴史を止めているというさびれかたであった。そして、この古くて大きな書院も、仮本堂も、昭和三十一年の久慈川の橋が完成した時の祝賀花火が不発のまま本堂下に入り、そこで爆発して、一

夜の中に全部灰となってしまった。

その後、守中裕幸、高瀬孝仁両正副住職の努力の甲斐あって、モダンな本堂と、立派な



(常福寺山門)

書院が完成し、此の十月下旬に落慶法要がいとまれるまでになった。十年前のこの寺を知っている人は、その変貌の甚だしさに一驚

するに違いない。

所で、この寺には、誠にめずらしい法要が伝わり、今なお、それはこの土地の人々の楽しい年中行事の一つとして、賑やかに行われている。

二十六夜尊

これが、その法要の名前である。いうなれば、一種の村の祭りの様になっているのである。

二十六夜尊とは、浄土宗の七祖であり常福寺の二代である聖阿闍梨上人の御命日である九月二十六日（旧暦）の法要である。今年は、新暦では十月の三十一日に当るので、そのお通夜から始めて、三十、三十一の両日が、その法要の当日ということになる。

問師と略称するこの上人は、浄土宗にとっては、誠に大切な人で、浄土宗中興の祖と仰がれている。即ち、浄土の伝法を確立し、破邪顕正して、独立宗派としての浄土宗の面目を発揮した人であった。師は、眉間に三日月形の痕跡があったので、世に三日月上人と呼称され、今でもその様に愛称されている。

こうした問師の法要が、果して何時頃から

今日みる様な二十六夜尊として、盛大に行われる様になったかは、よくわからぬが、珍しいことである。



（同寺本堂）

この寺には、現在八百近い檀家があるが、二十六夜尊の法要は、単にこの寺の檀家を中心としたものでなく、実に近郊近在の人々の

村をあげての法要なのである。遠く大宮、太田、水戸方面から、バスや汽車でやってくるのであるから、それがどんな法要か、想像できるであろう。問師の徳が、どれ程であったかを示しているといってもよい。

法要は、通夜、即ち日没から始められ、翌日の日中を以て終る様になっており、丁度、六時の法要が、それぞれに当てられる。六時礼讃が、それに相当してあげられることは、いうまでもない。

更に変わっているのは、単に浄土宗だけの法要でないことである。近郊近在の各宗寺院が随喜し、共に読経するのである。そして、導師も、又常福寺住職のみでなく、浄土宗の各寺の住職が交替で奉仕する。全仏教をあげての法要ということとなる。

法要の前日頃から、山門、中門にかけての道の両側には、ぎっしりと出店がならぶ。季節のリングや柿は勿論、さまざまな店がにぎやかに並ぶ、寺のはからいで出されたポンボリ燈や、常夜燈が輝やき、物淋しかった一帯は、たちまち不夜城と化し、参拝者が雑踏する。日頃、淋しい瓜連の町も、この時だけは

活気を取り戻すのである。

参拝の人々は、小さな経木塔婆を供養する。これには死んだ人の命日だけを書いても



(浄火供養)

人う。数万枚に上るこの塔婆は、寺方や世話ら衆が、六つの仮屋に陣取って、必死で書き

続ける。見る見るこれは、真中に飾られた地藏堂に一杯になる。

やがて、着飾った僧侶が浄火供養に出て来る。般若心経の読経の中に、浄火僧は、祖先供養と、五穀豊穰を祈りつつ、敬虔に経木を焼く、浄火供養をする。

夜の闇を破る様に太鼓が鳴り響き、浄火が、赤々と四圍を照すころ、法要は最高潮に達し、参詣の人波は、後を絶たない。遠くでは、客引きの呼び声が交錯する。それは、もう遠い昔の思い出の祭りの様であるが、今なお、ここではこの様な祭りが行われている。

火事で焼ける前には、お籠りというのがあり、遠隔の人々が、本堂に籠って、一夜を明し、特意の声自慢もやっていたが、火災にあつてから絶えてしまった。一つには交通の不便もあった様である。法要も、中夜、後夜とあったのであるから、終夜法要であつたわけである。

村人にとっては、誠に楽しいお祭りである。そして、これが終る頃、いよいよ本格的な取り入れが始まるわけであるから、その為の息入れという意味もあるに違いない。それ

にしても、問師をしたうこの法要は、誠に珍しいものである。

一時さびれていたこの法要も、住職たちの努力で再び盛んになって来た。法要を通しての伝道も、為されつつある。こんな法要は、是非いつまでも、にぎやかに続けてもらいたいものである。



東南アジア旅行記 (六)

佐藤 行 信

(大正大学講師)

十一月二十六日

ゴラクプールについたのは、朝六時、駅におりると、こんなに朝早く駅に一人の仏教のお坊さんが我々を迎えに来てくれた。蒙古人のマンガル・ヒリダヤと云う人で、クシナガラ管理をしている人だ。我々の宿、スタンダートホテルと云うのは駅の近くなので歩いて行った。ここは、ホテルという名はついてゐるがバンガローである。この旅行中でもひどい宿の一つであつた。駅からバンガローに行く間、樹の下に寝ころんでいた牛や猿が、むっくり起き出して我々に目をむけていた。ホテルにつき、部屋割をきめて貰い、一休みしてから朝食となつた。勿論風呂もなく、うすよこれたベットが二つ並べてあるだけの殺風景な部屋である。一休みしてから朝食となつた。こんな宿であるから、朝食と云つてもろくなものはないが、ここで、団員の山口氏が持ってきた即席味噌汁をお湯に入れて皆で味わつたが、このおいしかったこと、夜行列車で疲れた眼がはっきりした感じであつた。そのあと、午前中は自由行動であつたので、

部屋に入り、ベットにレインコートを着たまま横になって寝た。ただし蚊が多いのにはまいった。昼食後、五台の車に分乱していいよクシナガラに向つた。曇りがちの天気のため、涼しくて気持がよい。ここから、クシナガラまで三十マイルだそうである。この道路もなかなかよい並木路であつた。

クシナガラは、釈尊涅槃の地である。釈尊は、三十五才で覺りをひらかれたあと、四十五年間、インド各地を教化して巡られた釈尊は、八十才にしてこのクシナガラにおいて遂に大般涅槃(だいはつねはん)に入られた。涅槃は、ニルバーナの音をとつたもので、滅度、寂滅、不生、円寂などと漢訳している。一切の煩惱(わづらい)を脱して迷界に再生する業因を滅した境地のことである。ここで釈尊のご入滅の前後の様子を想起してみると、釈尊もお年八十才になられ、いつも所々をめくり、法を説いておられたが、釈尊のみ足は、いつしか北方にむかいヒマラヤの下にある自分の仰国カピラバスツに向つた。ガンジス河をわたって、ベーシヤリ城に入られ、釈尊は小高い丘のうえにお立ちになり、とおくの町

々をごらんになり、「ああこれがペーシヤリを見る最後であろう」と仰せになった。それから釈尊はさらに足を北にすすめて、パーバ城におつきになった。ここにチユンダと云う鍛冶屋がいて、釈尊に対して明日お食事をさしあげたいと申しいでた。釈尊はこの申しいでを快くおうけになった。チユンダが料理して差しあげたのは、スーカラマツダバムと云うものであった。これは野猪が好んでたべるキノコといわれている。釈尊はこの供養をうけになつてから急に腹痛をうったえられ、あとに引きかえし、クシナガラ城外にたどりつかれた。そしてサラ樹が並んでいる間に衣を四つにたたんで敷き、ここに横臥せられた。このとき釈尊のおそばにいたのは阿難ひとりであった。釈尊は額を北に、右脇を下に両足を重ねて病臥せられた。やがて病もますます苦痛をまし、釈尊はもはや、最後がきたことを覺られ、次のように仰せになった。

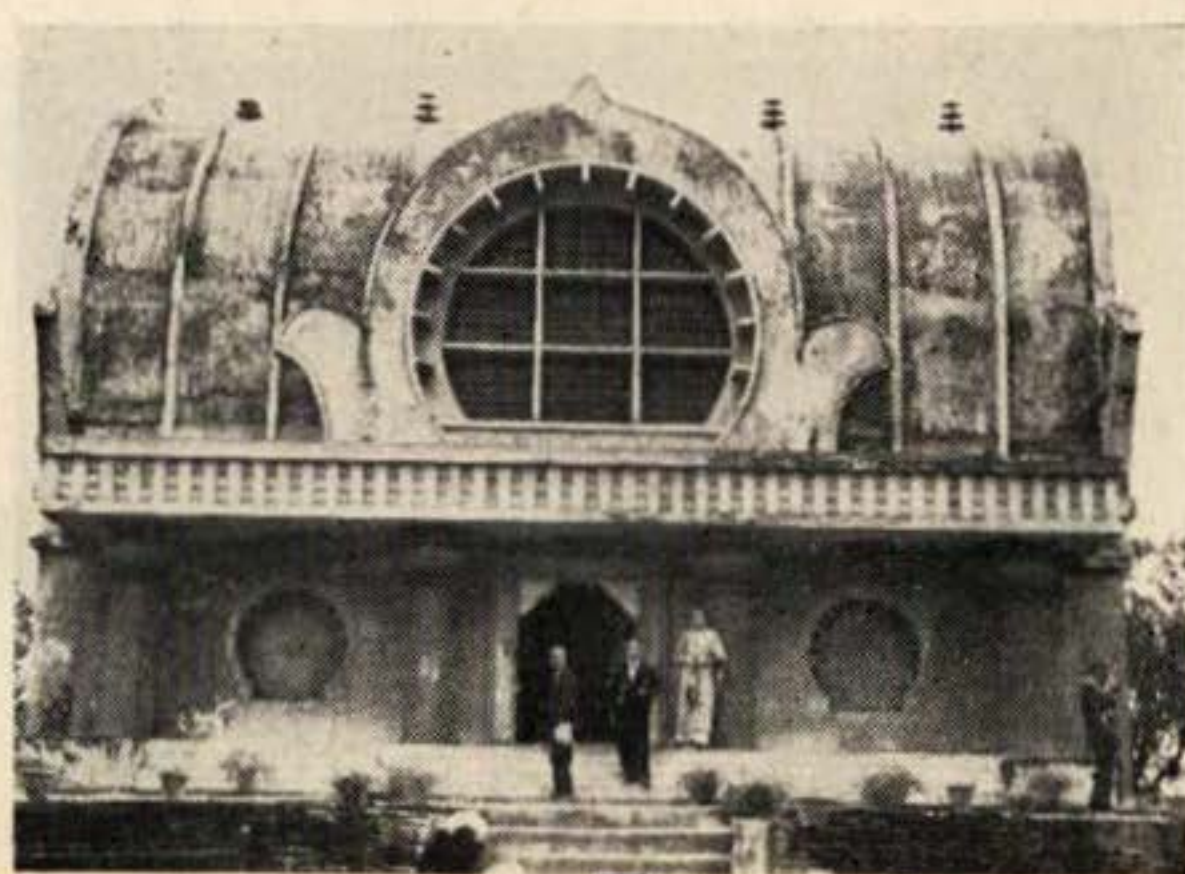
「比丘たちよ我れいま汝等につく、諸行は実は無常なり、努力によりて大成せよ、これ如来の最後の訓言なり」こうして釈尊は、八十年の生涯をおわられた。この釈尊が逝かれてからあとに残つて仏陀の教団を統轄してゆくものは、大迦葉であった。これよりさき、智懸第一といわれた舍利弗は釈尊よりもはやく死んだ。神通力第一といわれた目蓮は、執杖バラモンの暴力団に殺された。ここで修行第一の大迦葉が釈尊のあとをついだのである。大迦葉は急いでクシナガラにおもむき、釈尊のご遺形を火葬にしたり、ご霊骨を八種族の人々に分配したり、後事をすべて処理したのである。

クシナガラにつくと、正面にめずらしい形のお堂がある。このうしろに黄金の塔があったのが、今、再建のため修理中であつた。やがてそのお堂の中に入り、涅槃像の安置されている前で、蒙古人のお坊さんが用意してくれたローソクと線香をあげ一同で読経した。ここも他の仏跡同様、塔は修理中だが他はよく整理されている。草花なども植えられ、新しい樹木も肥っているが、この中の一樹をこ

れは沙羅樹と教えられた。

次に釈尊を茶毘に附した仏陀の茶毘所に行った。茶毘所は小高い山になっている。ここは、釈尊の肉体を浄化したところであるから、

一同がもつて来た戒名や記念物を山の中腹に一まとめにして火葬し、一同で読経して仏祖の涅槃を幻想した。その後この近くのバンガ



(クシナガラ)

ローでお茶を飲み一休みして、またもと来た並木路をグラクプールにむかつて走った。帰途の途中、雨も降って来たが、我々一行の車

の一台が、二頭の牛車と正面衝突した。一時は、牛は印度教では聖なる動物、その牛と車が衝突したのだからどうなるかと心配したがその場合は、いったん自動車会社の人にまかせて引き揚げた。しかし宿に帰ってから夕食の時皆で相談して見舞ってやる事にした。現在牛は印度で一頭三十ルピー（二千二百五十円）位だそうで、二頭分六十ルピーを皆で出しあつて、団長の木村先生に会社側の案内人と見舞に行つていただく事とした。会社側の印度人の案内人は、あなた方と関係ない当方の運転手の責任だから、そんな事する必要ないと云つたそうだが、印度のお百姓にしてみれば、六十ルピーでも大金だし、恐らくカーストがいまだある印度では、自動車会社がお百姓に賠償をすることはまずないであろうし、特に我々は案内人が何んと云つても、日本人の善意を向うに伝えるべきだとして、団長の木村先生に御足労願つた。あとで木村先生からの御報告によると、印度人特にお百姓など喜怒哀楽の表情など言語になかなか彰わさないの

でその心情は、眼をみる以外ないが、非常に感謝している眼をしていたから喜んでくれた

と思うと話されていた。

十一月二十七日

昨晩はあまり快的なベットでもなかったが、まあ旅で疲れてるせいもあるのだろう。小生は割合よく寝た。本日は、午前九時ゴラクブル発の汽車でノーガル迄行き、そこから、バスでルンビニーに行くことになっていく。朝食後荷物をまとめ、九時迄に駅に行きベナレスから乗って来たのと同じような車輛で約三時間、晴れあがった印度の田園風景など眺めながらノーガルに向つた。ノーガル駅につくと、なんやら、二、三十人の人が出迎えて出ている。きつとこの列車で偉い人でも来るのだろうと話していたら、何それがノーガルのマハボデイソサエティの人々が我々を出迎えに来てくれるのだと聞きおどろいた。汽車を降りる我々団員一人一人に花のレイをかけてくれ、女の子が赤いピンローシユの紅を丸く指先で額につけてくれた。これが印度式の歓迎だそうだ。そこで我々も整列して、団長さんが御礼の言葉を述べ、印度人のマハボデイソサエティのノーガルの支部長さ

んも歓迎のあいさつをされホームでの歓迎会を終った。それから駅長室に入れてくれて、ここで持参の弁当で昼食となった。昼食後三



（ルンビニー）

十分程休んでから、駅からバスでルンビニーに向つた。ノーガルのマハボデイソサエティの支部長さんも一緒に案内してくれた。この

新会員紹介

支部長さん白いネール帽をかぶっている。あとで聞いた話したが、この白い帽子をかぶっている人は印度の与党の国民会議派の人だそう。このノーガルからルンビニー迄は約三十哩だそう。途中、ネパールとの国境を通り、ここの駐在所のような建物で我々のバスポートをネパールの検閲官が調べ、それからいよいよネパールに入った。いよいよ釈尊誕生之地、ルンビニーに到着した。遠くには薄くヒマラヤ連峯がみえた。ここには、アショカ王が釈尊誕生之地であると記した石柱があり、そこで皆で記念撮影した。このルンビニー園は、花一っぱい運動をしていると聞いていたが、どうも手入れもされてなく、また日本から贈られた誕生仏もルンビニーにあるネパールの寺院に安置されていたが、ネパール流に上半身を金に下半身をエビ茶にぬられ、日本の仏像と云う感じはぜんぜんなくなっていた。このネパールの寺院の誕生仏の前で読経し、持って来た記念品を集った近所の人に配った。このルンビニーはネパール政府があまり仏教に関心を寄せないらしく、十分な管理が行なわれてるとは思えなかった。帰りの

バスからみた夕日にくっきりみえたヒマラヤ連峯の美しさは印象的であった。帰りがけ駅の近くでマハボディソサエティの事務所により、そこで日本からもって来た贈答品を送った。物置小屋のようなところだったが、幹部が我々の労を謝すと同時に日本を偉大な国と礼讃してくれたことは心地よかった。そこからノーガル駅でお茶を飲み、午後六時四十五分発の列車で、バアルランプールに向った。バアルランプールには夜十時二十四分に到着した。そこから十五分程バスに乗り、今晚の宿、マハラジャレストハウスについた。これは昔、マハラジャ王様が西欧人の賓客を招待したり、宿泊所にしたりする迎賓館だったところである。なかなかりっぱな建物である。現在には旅客のためのバンガローになっているのだが、幾つもある部屋は、天井が高くて広々と間どりがとられ、壁にかけてある絵画などもそのままになっている。この遅い夜十一時すぎに夕食を作ってくれた。本日で、今度の旅行の最大の目的である四大仏跡、ブツダガヤ、サルナート、クシナガラ、ルンビニーと無事巡拝出来たことを感謝する。

川崎市井田三六五	長瀬 周造
横浜市港北区箕輪町二〇六	田辺 泰恵
山形県上山市北町一	称念 寺
千葉県山武郡蓮沼村蓮沼二〇三	極楽 寺
神奈川県中郡二宮町一色七六五	浄源 寺
茨城県猿島郡猿上島町逆井	常楽 寺
室蘭市御前水町一五	観音 寺
貝塚市地藏堂二三四	上福 寺
上田市常盤城	芳泉 寺
津市新町古河	法花 院
京都府丹波園部町小山	教伝 寺
滋賀県野州郡中主町井口	仏法 寺
東京都杉並区下井草一の一	中島 靖郎
岩手県紫波郡紫波町片寄	佐藤 栄一
伊丹市伊丹字山ノ上四三一	伊藤 真澄
諏訪市西隣町	貞松 院
神戸市東灘区住吉町	阿弥陀 寺
函館市湯川町二の三九の八	中野 兼雄
神戸市兵庫区有野町唐櫃	専念 寺
鈴鹿市加佐登町	浄安 寺
三浦市初声町三戸二、四七三	光昭 寺

よいお手伝いの

お竹如来



戸松学瑛

(東京・芝・心光院住職)

一粒の米、一握りの麦をよ、そにして、わが国の食糧事情は

解処することが出来ません。米のめしとお天道さまはついて

廻わるとは申すものの、さて、おいちゃん、ばあーちゃん、

かアーちゃんの三ちゃん農業を感謝し、随喜渴仰せずには居

れません。今は昔、八犬伝でお馴染みの馬琴と時代を同じう

する南仙笑^{ミナモトセンシヨウソウマン} 楚先生の愛誦と伝えられる士女訓に

お竹大日如来

一、時は慶長末のころ

花の都の伝馬町

佐久門勘解由^{カゲユ}の召使

お竹大日如来さま

奥州出羽の湯殿山^{ユヅマツ}

権現さまのおん化身

衆生済度^{シュジョウジウド}のためにとて

はるばる江戸に御奉公

二、赤いタスキにお前垂れ

姉さんかぶりに身をやつし

ほね身おしますずマメマメと

ママをたいたり水しごと

ながしの下に布さげて

一粒のこさず米ツブを

モツタイなやとすくいとり

おのが食事^{ケシイ}にめし上り

おニギリにぎって乞食^{コジキ}に

干飯^{カンイ}にほして小雀に

ほどこしやれば一茶翁^{イチサウ}

慈悲^{ジイ}仏性^{ブツショウ}に感じ入り

雀子や お竹如来の流しもと

おれと来て 遊べや親の ない雀

三、お流し下^{キト}からピカピカと　きれいな後光がさしたとサ
鍋、カマ、オハチ、当りパチ　すりこぎ、目ざる、チリ蓮華
ドンブリ、茶わん、皿小鉢　みそこし、セイロ杓子まで
毎日毎晩ピカピカと　丸い後光がさしたとき
江戸にはやりし川柳^{セリウ}に　末世まで　てらす後光の
さした下女

四、浮世絵名師の面々は　筆をふるって画き立てつ
田之助、梅幸、諸名優　歌舞演劇に上演す
五代將軍綱吉の　母上従一位桂昌院
光のさしたお流しを　後の世永くのこさんと
赤羽川のほとりなる　心光院へ奉納す

五、如来に信心ある人は　奉公人をさづかりて
お家の繁昌身の安のん　よき仕合せにめぐまれむ
お竹如来の御詠歌に
手と足は　いそがしけれど　ナムアミダ仏
口と心の　ひまにまかせて

とありますが、ことし八十才のおトラお婆さまは、おまいりのたびごと

お竹大日お如来さまよ

昔ごはんたきしたそうな

とくり返しくり返し、身につまされて幾たびも愛誦して居られます。昔をしのばれる事ではあります。

○

徳川五代將軍綱吉公の御生母、従一位、桂昌院さまは下女お竹の行状に感じ入り、末世の鏡、後人の手本なりと賞めそやされ、特にその流し板の奉安所、増上寺別院心光院に、富久佐、三葉葵の定紋打ったる手箱を寄進あって竹女の徳行を賞美されました。

桂昌院の御歌

ありがたや　光と共に行く末は

花のうてなに　お竹大日

天下さまの御母堂と、おさんどん。俗に言う提燈につり鐘のたとえ、この事あって一層、竹女の徳行は婦女子の鏡と世に仰がれました。

○

竹女の慈悲心は非人乞食へのお施しはもとより、禽獸、智類に及んで底知らず、雀に縁のある小林一茶翁も句にうたいわが身に引き当てて、随喜して居られます。

時は移って大正十五年、花の都の東京で日本赤十字社五十年記念會議が開かれ会長は徳川家達公、その幹旋により慈上寺關係の宝物展覽、その随一に慈悲博愛の赤十字精神の実行者として一下女お竹さんの、お流し板と肖像が出陣せられ何等かの印象を外人のお客様に与え得たと思う。徳孤ならず必ず隣りありとか、宜なるかな。

人目高いは江戸の町々、八百八丁の隅からすみまで、お竹の行状がひびき渡り瓦版へ売られ、錦絵は飛ぶ、当代の画家豊国、国芳等々筆を振って百美人の随一と書き立てる、今に筆のあとは民間に残り心光院に保存せらるるも、めでたし。他の振りを見て、わが振りなおす、太平遊惰の気風も一ぶくの清涼剤を得たる如く、心ある人はさぞやよろこんだことであらましよう。

文化文政の江戸時代末期ともなれば歌舞伎、千両役者、田

之助、梅幸の名優、紛するところのお竹さん、大当りを取って評判々々、所謂ハーチャン、ミーチャン族に、すこぶる感動を与え、大入満員の光景であつたと想像されます。

現代美人画の著名画伯、竊木清方氏は、お竹の徳行を賞讃し、特にお竹の半身像を画筆に染め文部省の展覽会に出陳し、世人の注目を新たにせられたる如き、今も昔も徳孤ならず隣りありと云うべきか。

美術評論家として定評ある北川桃雄先生はこの一軸を賞讃して、

美の美、

江戸名所図絵は増上寺別院心光院を、しるした部分に、こんな伝説を引き、その竹女水盤が心光院の門の天井にかけてあり、かつて光明を放ったと同寺縁起にある。又この絵は昭和十八年の文展に出品されたが、いつもの美人画とちがって鶯茶色の着物に、前掛姿、米粒の袋をささげて立つ庶民的女性の姿が人々をおどろかせた。しかもその崇高な面さしや、立ち姿は、あたりの邪気をはらって莊重でさえあった。作者の意図するところは婢として身分低い庶民婦人の姿のままに神格を与えるとゆうことだったろう。そし

てそれは見事に成功した云云
と賛して居られる。

○

人の命つながせたもふ米ほさつ

はし取る毎におがめとぞ思う

と先年物故した宮城白石の歌人、菅野円蔵翁は八十八の高齢
記念として、お竹さんを賛美し了って往生を遂げられた。

○

一升の米は産地によってちがうが大体八万数千粒。日本国
民一億人が一日一粒ずつを大事に生かせば一日一億粒浮ぶ。
之が一カ月三十日に計算すれば実に貨車で運ぶかさとなる。
一粒の米、何ぞ大切にせざるべけんやです。

昔の老人がお米をそまつにする目がつぶれると教えられ
た事も昨今では昔物語、一笑に附されがちですが、心すべき
ことでは、ありますまいか。これは単なる儉約の美德だけで
始末すべきでなく寧ろ、みょうり（冥利）の問題として考え
らるべきでありましょう。

○

その昔、世に行われた数え歌。今も昔も、お米の味をかみ

しめてくらしたいものです。

お竹大日かぞえ歌

一つとや、人の鏡と、仰がれし

お竹如来をたたえよや

二つとや、ふたつの頃から、いただきし

お米の御恩を、忘るなよ

三つとや、瑞穂（みづほ）の国と、神代から

伝えつたえし、米の国

四つとや、世の人すくう根もとゆえ

お米をよね（世根）とは、申すなり

五つとや、いのちの糧の根もとゆえ

お米のなる木をいねといふ

六つとや、昔もむかし、三百年

お竹如来の、水仕ごと

七つとや、ながしの口に、袋（ふくろ）さげ

流さずすくう、お米つぶ

八つとや、やさしい心で、たすきがけ

ほとけ心で、米いかす

九つとや、心の底から、お念仏

おながしもとから、さす後光

十とや、年月へても、今もなお

女子の鏡と仰がるる

お竹大日如来さま お竹大日如来さま

信仰生活七つの指針

山口 演 真

(滋賀・善正寺住職)

感恩——今夏は異常な日照つづきでサバクとまでいわれた東京を始め各地で大変な水不足が起きた。北陸の名刹永平寺の門前に半杓橋というのがある。ここの開祖道元は杓で汲み上げた水は、その半分で用を足し、残した半分は流されたというのに因んで、つけた橋名である。永平寺の山は水量は豊かで、永平寺一山の需要の為に、あそこで自家発電をしている。それ程水に恵まれているので、水を節約する必要は少しもない訳である、しかし道元は汲み上げた水は仏から頂いた水で、出来るだけ節約して、残した半分はお礼にお返しする意味で流された。一杓の水にも感恩の思いを以てする、こういうのが信仰者の風格である。

儉素——今日のような大量生産、生産過剰の時代にはその必要もなく、従って美德とも考えられなくなった。けれども吾等は自分の日常生活を反省する時、放漫な慾望の満足より

は、或程度の自制節欲をした方が簡素で清らかな思いがして、その奥には人生の深い意義の存するのに気付く。自分の周囲にある物は皆自分を生かし育てん為の天与の恩物と思えば粗末にはできず、自ずと節約せられるわけで、

天地のよろづの備へ誰がためぞ

子等を育てんみむねならずや。

節儉は貯蓄につながり誤られ易い。今節しておいてと将来を見越しておくようでは、我利の爪をのばしていることになる。信仰の道では所有欲から来る煩雑な悩みから離れて、少欲知足の簡素な生活を希求する。随って蓄積せられた分は、社会大衆の為に供与して行く。生産財も天与の資源についても、自分の欲望は十分切りつめて、恵まれざる者、又社会大衆が平等に洩れなくその利に潤うことを希念する。これが信仰者の物資についての心掛である。

敬いつつしむ——信仰とはお任せする事であり、任かすとは自分を引っ込め、己を虚しうして、相手に同化し一体となることである。それには自らつつしみ、相手を敬うことが大事である。自らつつしむ事で、汚れた自分は洗い清められて、その姿をなくし、敬う相手について合体するようになる。自ら上品上生の往生を願うといった蓮生熊谷はその志操を實行し、東下に逆馬を用いたのは、つつしみ敬う事のかがみとして、今に伝えて美談とせられている。荒巻くめという妙好人は疊数枚敷の家で細々と独ぐらしをしていたが、仏前の一疊だけを自分の心で区切って、毎日の起臥にも、来人の応接にも、決して不敬粗相のないように、嚴重に自らその独を慎んで仏前奉仕を怠らなかつたということである。こうした敬い慎しむ行持作法はますます信仰を深めて行き、深まつた信仰はいよいよ敬いの行儀を高めて行くのである。

專一——人間は二人の主人につかえる事はできない。それと同じく人間は富と神とに仕える事はできぬ。又精神と肉体と双方の慾望を満足して行くわけにはいかぬ。信仰は人間の雑事に愛想をつかし、それに堪え切れなくなって、人間以上の仏に自分の総てをお任せして、心を清め安らぎを得させて頂く事であるから、人間界の事に満足しない心と、一方未だ人間界の事に関係するようでは、西に向いながら東の方へ

も行って見たいと思うのと同じで出来ない相談である。舟を岸につないだままで、しきりと舟を漕ぐようで、何としても進みようがない。心を一つに定め正念を持ちつづけて行く事は容易ではない。雑縁乱動して正念を失すで、この世は心が散り易くできているのに警戒を怠ってはならぬ。まして世界は日に日に狭くなり、わけもなくさわがしいマスコミの世は、人を物知りに仕立て、世智弁聰で、何でも知っているが、肝心の事、心奥の靈性などについては何も知らず、又知ろうともしないのが今人の通弊である。宜しく外縁を屏絶して正念を端持すべしという言葉の通り毎朝何分間か月に一二回位は時を定め所をえらび、靈性開発の為に身も心も調えるよう工夫し励むべきである。

世福——信仰は精神修養や品性向上の為ではない。又商売繁昌や病気を治すのに役立てるものでもない。しかし世には家内安全、商売繁昌、息災延命、心願成就などを目的とする信仰もあり、又その様に勧める宗教もある。けれども安全、繁昌、延命を祈る心の内面には此世に思いを残し、それについて自分の思惑がひそんでいる。それでは己を虚うして一切をお任せした事にはならぬから、健全な信仰ではないし、又正しい意味の宗教信仰ではない。ここに安全繁昌健康などは誰もが念願し掛念深いものではあるが、信仰の対象に

はすべきものではない。けれどもその結果から見ると、これらの世福は信仰とは無関係ではないのである。信仰生活は自分の欠陥に気付き絶えず反省し常にサンゲして行くから精神修養にもなり、久しき間には自ずと品格も具はり、いつの程にか顔立人相まで和やかに円満になって人には好かれるようになり、信用も高まって自然に繁栄を来たすようになる。又世のいざこざは一切を挙げてお任せしてあるから、いつも心にいらぬ心配苦勞がないから、朗かで身も心も伸び伸びしているのも、病も軽くてすみ、一般の薬もよくきいて早い目に治ってしまうようになる。世福は祈らず求めずして、ひとりでに余徳として必ず恵まれるものである。

精勵——人間は情け心が強い。正しい、善いとは知りながら実行となると物憂くなって出来にくい。たわいない世間話を聞く時は、みな打興じて居眠りなどする人はないが、身為になる結構な講演になると大半の人が居眠りを始める。人間は動物から進化したというが、長い長い間の動物生活の習慣は惰性からぬけきれないのである。世の営み悪をなす時は寝食を忘れ、善をなす時は起居みなわずらわしいと先哲もなげかれた。まことに勇猛に励まなければ靈性の開発は覺束ない。志願無倦、自策自勵、勇猛精進、常に憶して忘れまいぞ。

忍耐——信心とは有難い事とのみ法悦の方面ばかりいわざ

て実践體驗上の悩みが明かにされていない憾みがある。浄土門は易行で『喻へば水路の乗船は楽しきが如し』の修飾句を引いて強く説明する伝道者もいて、誤解され易い。聖典には難信之法、難中之難、無過之難と何回となく難が出ているし、導師も生死甚た厭ひ難く仏法またねがい難しと、仏祖は難という事を実に矢釜しうお示しになっている。日課念仏の勧めはよくこの事を明かしている。念仏は申したい時申せばよいのではない。申したくない時にも申すのが日課である。気の向いた時も、心の進まぬ時にも申すので日課といえる。只一向にとの祖訓は理屈もわけもなく、なにわの事もあしかりぬべしと遮二無二申しつづける。これには忍耐がいる。事の成る成らぬは継続するか否かに係る。日課相統というが、続けるには何よりも忍耐が大事。信心とは忍耐、信仰とは忍力のことではないか。

浄土宗義の研究 第二輯

仏大講師 岸覺勇 著

A5版 三五〇頁
定価 五〇〇円
送料 九〇円

三重県四日市市六呂見町 観音寺中

発行所 記主 禪師 鑽仰会

振替 名古屋 四〇一 二番

信仰の手びき

浄土三部経ものがたり(二)



宮林昭彦

(大正大学助教授)

○

つづいて、感無量寿経のおはなしをいたしましょう。このお経は、無量寿経の弥陀法が、極重悪人をお救いくださるという現実を示したものである、という事ができましょう。

如来の大悲は、一切衆生に満遍なくそそがれるにちがいないのですが、極重悪人なるがゆえにみすてられてきたものには、そう簡単に納得できるものではありません。やはり、よくなってほめられようとする心が、どこかにはたらくことになるのです。だから、弥陀法を説くとしても、実際問題としては、こうした人間の心のうごきをよく理解しつつ、それに

さからわないで、効果的にみちびくことが必要であります。こうした、実際問題を考慮にいれて、弥陀法に誘引しようとしたのが、このお経のなり立ちであります。

王舎城の王宮の悲劇を縁として、悲劇の主人公である韋提希夫人が、はるかにそびえる耆闍崛山において、弟子たちに説法中のお釈迦さまにむかって、お救いをもとめたのであります。最愛の子供にすらそむかれねばならない、罪業深い夫人の救われるべき道は、ただ一つ、弥陀の大悲によるほかはないと、お釈迦さまは、百も承知であられました。

そこで、お釈迦さまは、夫人に、弥陀の浄土を願わしめたのであります。しかし、夫人は、弥陀の救いにあずかるため

には、弥陀法の開顯される以前、釈迦法において、いつも禪觀をもつて、救いの道としてゐるのを思いおこし、弥陀のすくいにも、またその必要性を考えて、その方法を示されるよう、お釈迦さまに懇請したのであります。

それが、無量寿經におけるすくいの本領でないことは明かであります。しかし、また、悲痛のどん底におちこんでいる夫人が、禪觀に堪えうるとも思われませんでしたけれども、愁憂憔悴した夫人の心をそつとしておこうという慈悲のころから、お釈迦さまは、夫人に請われるままに、みちびきの意味で、浄土を觀ずるための禪觀を、十三通りに分つて説かれたのであります。善導大師の、いわゆる定善十三觀というのがそれでありましょう。

○

弥陀法の眼目は、一切の人びとが、もれなく救われるところにあるのです。十三の觀法を完全に実行することによつて、弥陀の浄土に往生することは、もちろん可能でありましょう。しかし、實際に、それを実行しとおせる人は、きわめてまれであります。もし説法が、これで終らせてしまうなら、禪觀を修行しえない人びとには、すくい道がひらかれないことになってしまいます。そこでお釈迦さまは、韋提希

夫人に対する答えはおわつたのでありますが、さらにすすんで、禪觀を修しえない人びとのために、すくい道を示されることになったのであります。お経で申しますと、それが、あとの三觀、三福九品段といわれる説法が、それであります。

三福とは、世福、戒福、行福をいうのです。すなわち、世間の道德と、お釈迦さまの制定せられた戒律と、大乘の菩薩行とのことであります。九品とは、三福をおこなうべき人間の品柄を、上、中、下とに分ち、そのおのおのを、さらに上、中、下と分つたので九品となるのです。

お経によりますと、上品のものは、三福をすべておこなうことのできる品柄であるとし、ないし中下品のひとは、世福だけしかおこなうことができない品柄であるとしています。しかし、とにかく、それをおこなうことによって、浄土に往生すると説かれていたのであります。

しかしながら、一切の人びとをもれなく救ってくださるという立てまえから申しますと、三福をおこなうるものはよいとしても、おこないえないものには、それでは救いの道とはならないことになります。現に、九品の中の下三品の人は、三福無分といわれて、三福をおこなうどころか、善導大師が、「遇惡の人」といわれましたように、下上品は十惡の人、下中品は破戒の人、下下品は五逆の人といわれる品柄

で、いずれも救いようのない人びとであります。

ところが、これらの人びとも、まさに命の終らんとすると
き、善知識のすすめにしたがい、下上品の人は、合掌して弥
陀の名をとなえることによって、下中品の人は、弥陀の威徳
を聞かされるだけで、下下品の人は、十声の称名によって、
いずれも往生をうるということができるといふのであります。

下三品遇悪の人が、こういう方法で救われたといひますこ
とは、弥陀法においてのみ、はじめて、極重悪人をも救い、
一切をもらさないみ仏の大慈悲が実現されることを語ってい
ることになるのであります。

このように、思いをめぐらして、このお経の最後のしめく
くりであります、即ち流通文をながめてみましょう。お釈迦
さまは、韋提希夫人とともに、この説法のきき手であります
阿難尊者に対して、弥陀の浄土へ往生するために、やむな
く、いろいろのみおしえをお説きになられました、自分の
真意は、禪觀や三福にあるのではなく、無量寿仏のみ名を持
つこと、南無阿弥陀仏を信ずること、それひとつが説きあか
したかったのである。と結んで、この説法を終わっているの
であります。

お釈迦さまの最後のしめくりを聞きながら、このお経の
先の部分を拝読してみますと、よくよくうなずくことができ
ます。

たとえば、定善十三觀といわれる禪觀を説きつつ、お釈迦
さまのお説法の本旨が、禪觀にあるのではなく、実に、無量
寿仏の光明に相遇うことを説かんがために、うちひしがれて
いる韋提希の心を、そつとしてやろうとするあわれみから、
本心をかくして、請われるままに、禪觀を語られている様子
が、ところどころにうかがうことができます。

その一例をあげてみますと、第六番目の禪觀を説きおわら
れたお釈迦さまが、第七番目の觀を説こうとして、阿難尊者
や韋提希夫人に、これからのことは、苦惱を除く法である、
と注意をうながされております。引きつづいて第七の觀法が
説かれるかとおもうと、そうではなく、とたんに、無量寿仏
が空中にあらわれてまいります。お経には、

無量寿仏空中に住立し、觀世音、大勢至、この二大士左右
に侍立せり、光明熾盛にして具さに見るべからず、百千の闍
浮相金色も比となすを得ず、時に韋提希、無量寿仏を見奉り
已って接足作礼し、仏に白して言く、世尊、我今仏力に因る
が故に無量寿仏及び二菩薩を見ることを得たり、未來の衆生
まさにいかんが無量寿仏および二菩薩を觀じ奉るや」

と説かれて、そこではじめて、第七觀の法が説きはじめられています。ここなど、よく考えてみますと、突然に無量寿仏があらわれるのは、お釈迦さまの真意が、觀法にあるのではなく、觀法を請われるままに説いているが、実はただ無量寿仏、すなわち阿彌陀仏の光明をあおがんがためのみである、という心底にひめられたものが、表てにあらわれてしまったように受けとられます。

さて、彌陀法こそが、真実中の真実であるということをお釈迦さまだけでなく、十方の諸仏までが証明に立って、それをすすめているのが、阿彌陀經であります。

全体の構造は、法然上人もいわれていますように、二段から成り立っている、とみることができます。

すなわち、はじめは、浄土の国土と、浄土の主である阿彌陀仏と、その聖衆との功德が成就せられてあることを讃嘆して、のちには、そこに往くには、念仏をもってすること明示すすめているのであります。

国土については、宝樹、宝池、天樂、妙華、鳥音など無量の莊嚴をあげ、仏と聖衆については、光明無量のゆえに阿彌陀と名づけ、寿命無量のゆえに阿彌陀と名づける仏と、彼に無量身邊の聖衆、声聞、菩薩などの功德が成就せられてあることを讃嘆しています。

さらに、後段では、もしその国に往かんとねがう者は、少善根福德の因縁とお経には説かれています。自己の善根で生ずることができないとしています。彌陀の名号を執持してみだれないことを必要とすると明し、そのことは、いまお釈迦さまのみのすすめではなく、十方のみ仏たちも、また真実であること証誠して、その真実性を主張しているのが、この阿彌陀經であります。

わたしたちが、經典をもつ、ということは、ひとつの宗教的要求によるものでありましょう。經典をひもどくことによって、悩みがすくわれ、その語を思念することによって、心が開かれていくような、かかる經典をもつことは何にもまさる宝を蔵している、ともいえます。そして、その經典は生きとし生ける一切の人びとのために真実の道を説き明かしている、ということができましょう。その真実の道とは、真実の願いに順うことのほかにないのです。真実の願いは、如来の本願によってあらわされているのであります。

もういちど、浄土の經典をひもどいてみてください。二度、三度重ねて味わうことによって、末法、すなわち今に生きてゐるわたしが、真実の生き方を気づかせていただけ、安らぎのなかに、全心をうごかす力が湧きでてくることでありましょう。

編集後記

▽ハワイでの開教七十周年を慶讃して、特集号を編集した。小林宗務総長・新谷東京支所長・野島学事部長・戸松学英先生等三十名程の訪問団が行かれる由。ハワイでも、一きわ賑やかな事であろう。この際、更に浄土宗団の発展を祈りたい。▽新保義道氏は、今から十年程前、ハワイの開教師として渡布。現在ブウネネの浄土院で活躍中である。今回特に開教史ともいふべき原稿を頂いたので、特集号として掲載させて頂いた。▽井川定慶先生は、今更申すまでもなく、法然上人伝の研究の権威者として活躍中です。特に玉稿を頂いた事を感謝いたします。▽佐藤良智先生は、四十余日の世界旅行を終えて、九月二十一日無事羽田に帰着された。とてもお元気で、

ハワイのレイを首にかけての帰国であった。いずれ、本誌にも土産話を頂けるものと期待しています。

▽ハワイと言えば、ハワイの新聞に鎌倉の佐藤治子夫人の記事が載ったのを、編集部に恵送下さった。生け花のレディとして、更には英語の達者なレディとして大きな写真がのつていた。

▽大正大学では、学生ホールの改修が始まっている。いよいよ、佐藤学長のもと新しい動きが始められてきた。東山日出夫君がオリンピックに出るといふので、大きなアーチが校門につけられていた。活気があつていい。

▽浄土宗の教学院大会は、今年は大正大学で行われる予定で、宮林教学院主任は大わらわである。特に今年は教化両方面でシンポジウムを持つとかで、新しい試みである。教学では浄土

教の末法観の現代的問題を取りあげ、教化では「寺と檀家」という直接的なものを対象とするらしい。

▽鶴田湛泉氏の家康と登壇天室は、いよいよ佳境に入り読まされる読物となってきた。氏は此の後にも家康物の原稿を下さる事を御約束下さった。期待しています。

▽記録的な事柄が数々あつたこの夏も、いつのまにかすぎさつて、絶好の日々の続く今日この頃であります。が、法然上人鑽仰会々員の皆様方におかれては、御自愛專一に下さり、益々の御活躍を編集部一同お祈り申しあげて居ります。

▽今月は、ハワイ開教七十年を慶して特集号としましたので、随想、近世交名録、お茶に生きる人びとなど好評の連載を休載させて頂きました。ファンの皆様悪しからず御了承の程。

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 十一月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十九年十月廿五日 印刷

昭和三十九年十一月一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区飯田町一ノ廿二

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

郵便東京八二一八七番

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和三十九年十月二十五日印刷 昭和三十九年十一月一日発行

浄土 第三十卷

第十一号

定価金五拾円 (六円)

ご法語で味う 念仏の真随

村瀬 秀雄 著

一枚起請文をめぐって

新書版一〇二頁・写真版二葉
価 一二〇円・(送 三〇円)

目次……一枚起請文とは……観念の念仏を排す……
聖道はあり得ない……信仰の目標……本願念仏を
申す……ひらに信ずる……すべてを包含する……
二尊の前に誓う……只一向に念仏すべし……御遺
訓にはげむ……二相承の合流……ご法語索引

信徒必携の奥義書

ご法語一〇〇句を収録

発行人

法然上人鑽仰会

東京都千代田区飯田町一の二一
振替 東京 八二一八七番

香りたかき浄土トラクト 一既刊一

選択集私解	大正大教授 竹中 信常 著	新書判 価 120円 120P 下 30円
真理のはなたば	大正大教授 佐藤 良智 著	新書判 価 70円 下 20円
信仰への導き	文 博 佐藤 賢順 著	B 6判 価 15円 16P 下 10円
ご法語のしおり 葵ぐさ	村瀬 秀雄 著	B 6判 価 15円 16P 下 10円
浄土宗のおしえ	大助 正教 大授 宮林 昭彦 著	新書判 価 25円 20P 下 10円

念仏をひろめるために心をそそぐ布教家に (多数申込みには)
真実の信仰をもとめている檀信徒の方々に (割引いたします)

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (262) 5944
振替 東京 82187